ISSN 1340－5985

広島県立美術館

研究紀要

第14号

児玉希望と戊辰会（一）…… 永井 明生 *1*（46）
—資料紹介・原田信造著「戊辰会史」

資料紹介：1910年代前半の南薫造 …… 藤崎 綾 *34*（13）
－1912～15年の日記と版画制作

中央アジアの民族衣装・女性用脚衣についての一考察…… 福田 浩子 *46*（1）
—広島県立美術館蔵ウズベクのイシュトン、トルクメンのバラクを中心に—

2011

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.14

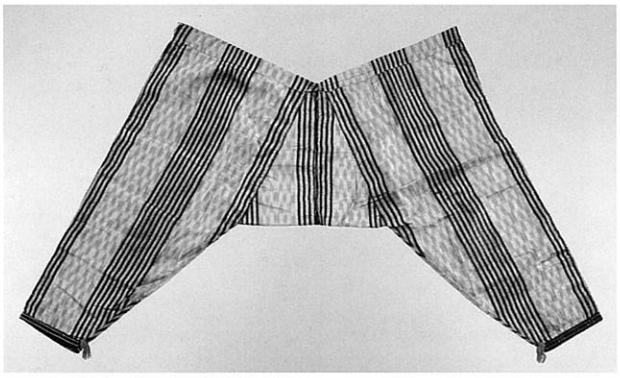
A Consideration on the Women's Leg Wear of Central Asian Traditional Costumes of the Collection of Hiroshima Prefectural Art Museum: Focused Uzbek *Ishton* & Turkmen *Balak* (46) *1*
FUKUDA SIDDIQI, Hiroko

Activity of Kunzo Minami in the First Half of 1910's (13) *34*
FUJISAKI, Aya

Kibo Kodama and *Boshin-kai* (I) (1) *46*
Introduction of the Material "The History of *Boshin-kai*" Written by Shinzo Harada
NAGAI, Akio

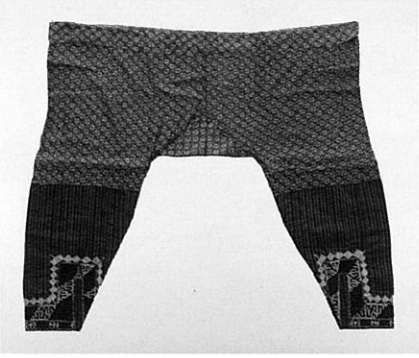
2011

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



口絵15

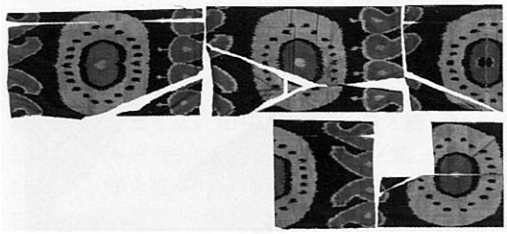
口絵16



口絵17

口絵18

口絵19



口絵20

口絵15　ウズベク人「女性用脚衣（イシュトン）」広島県立美術館蔵

口絵16　ウズベク人「女性用脚衣（イシュトン）」広島県立美術館蔵

口絵17　ヨムート族、トルクメン人「女性用脚衣（バラク）」広島県立美術館蔵

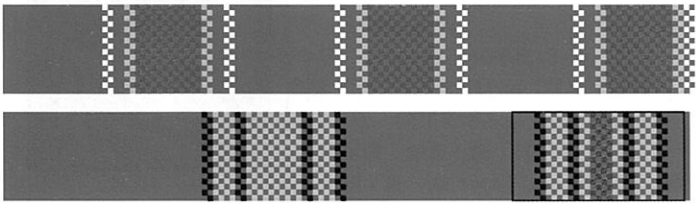
口絵18　ヨムート族、トルクメン人「刺繍裂（女性用脚衣）」広島県立美術館蔵

口絵19　トルクメン人「女性用脚衣（バラク）」個人蔵

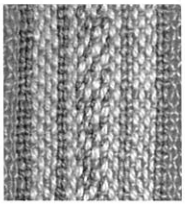
口絵20　イシュトン２の裁断推定図

口絵21　バラク１および２の経縞配色

口絵22　バラク２（部分）　口絵21の右枠内



口絵21



口絵22

中央アジアの民族衣装・女性用脚衣についての一考察
ー広島県立美術館蔵ウズベクのイシュトン、トルクメンのバラクを中心にー

福　田　浩　子

1　はじめに

当館は３つの収集方針のひとつである「日本を含むアジアの工芸」の方針のもと、中央アジアの染織およびトルクメンの装身具のコレクションを所蔵している。この内、染織作品は計190点である。これは中央アジアの多様な染織世界を網羅するものとは言えないが、充実した幾つかの核となるグループがある。例えば、ウズベクの刺繍布（スザニ）17点[i]、旧ソ連領中央アジアからアフガニスタン、パキスタン、ペルシア等の広範囲にわたる各種の刺繍袋コレクション124点[ii]を有しており、民族衣装関係では、ウズベク23点、トルクメン26点[iii]を所蔵している。

1997年、館蔵中央アジアの工芸コレクションの背景と現状を調査するために、旧ソ連領中央アジアの地を踏む機会を得、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンを訪れることができた[iv]。２回目からは毎年のように単身で赴き、美術館や博物館だけでなく、かつての雰囲気を残すバザールや伝統的な家屋、生活様式を見て歩いた。

トルクメニスタンの首都アシガバードの近郊に日曜市のように特定日だけ開設されるトルクチュカ・バザールがあり、市内から臨時バスに乗り込んで現地へ向かった。アシガバードからほど近い、カラクム砂漠のある場所にその日だけ市が立つのである。トルクチュカとは押し合いへし合いという意味らしいが、全国から人と車と動物が集まって確かにたいへんな賑わいぶりであった。首都では見られない伝統的な着装をした人々を見ることができた。但し、時代の流れか、被衣チルピやシルバーのジュエリーをふんだんに身につけた人は見ることはなかった。バザールでは食品、電気製品、道具類、布類、乗物類等様々なもの、羊や山羊、牛やラクダ等の動物が売られていた。絨毯を所狭しと何重にも広げた一角の裏側で民族衣装が売られていた。バザールでズボンを入手することができなかった、下衣は布地を買って作るもので買うものでないと教えられたと1981年の時点で民族服研究者の松本敏子氏は書かれているが[v]、ソビエト連邦の崩壊とともにCIS諸国が独立して６年を経た1997年には、探してまわれば、脚衣バラクが数枚見つかる状況であった。どれも裾の刺繍部で残りの布を折りたたみ、糸でざくざく縫って開かないようにしてあった。中を見せてくれたら買いますと言うと、渋々、ひとつだけ糸を切って広げてくれた。刺繍裾で挟んで全体が見えないようにしてあった理由は、バラクは素肌に着用する「下着」だからであった。長丈のワンピースを着た状態では裾以外の部分を見せることはない。その意味で中央アジアの脚衣は西洋のズボンとは別物である。本稿では脚衣としたが、むしろ下衣あるいは下着と言った方がニュアンスが伝わるのかもしれない。

国内での中央アジアの民族衣装に関する研究は決して多くはない。今回のテーマである脚衣に関連した研究の一部を紹介すると[vi]、ソビエト時代の1978年には加藤定子氏によってタジクの民族衣装について、1981年には加藤氏と松本敏子氏のそれぞれによってトルクメンの民族衣装について、1985年には加藤氏によるトルクメンの民族衣装について等、活発に報告されている。その後、1996年に広島県立美術館「アジアの染織展」の５章の一つとしてトルクメンとウズベクを中心とした「中央アジア」の展示を加藤氏の監修の下で行い、2005年の『偉大なるシルクロードの遺産展』では加藤氏監修による各種民族衣装が展示されている。

筆者は勤務する広島県立美術館の中央アジアの工芸コレクションに関する調査研究および現地調査などを通じて研究を継続してきたが、本稿では館蔵品と個人コレクションの実物に基づいて、中央アジアの民族衣装に不可欠な脚衣について考察を試みたい。なお、対象地域には数多くの民族があり、それぞれの衣装があるが、本稿ではウズベクとトルクメンに限って言及する。

2　ウズベクとトルクメンの脚衣

中央アジアには数多くの民族があり、民族衣装も様々であるが、共通点も多く見ることができる。女性の場合、ウズベク、トルクメンともに、脚衣（ズボン）を履き、長丈のワンピースに前開きのコートを着るという構成は似ている。また、内履きと外履きの２種類の靴を履く。ウズベクはこれに頭にスカーフ、外出時は身体をすっぽり覆ってしまう被衣パランジャと馬の尾の毛を編んだ顔覆いチャチワンを身につける。トルクメンは支族にもよるが、テケ族の場合はチルピという被衣やクルタを被る。女性の脚衣はウズベクではイシュトン、トルクメンではバラクあるいはイシュタンと呼ばれる。

(1)　イシュトン１　ウズベクの女性用脚衣（イシュトン）（口絵15、図１-８）

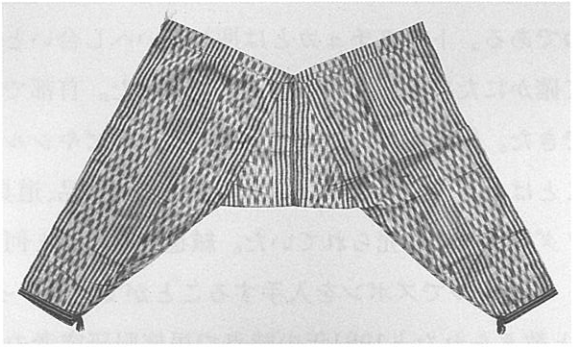
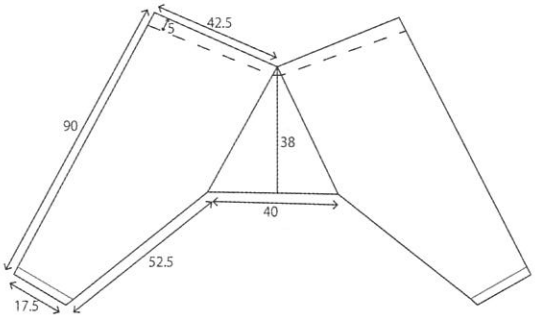


図１



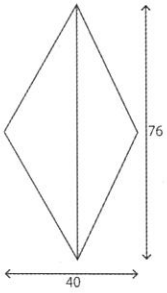


図２

図１　イシュトン１　ウズベク人「女性用脚衣（イシュトン）」20世紀初頭
広島県立美術館蔵
図２　イシュトン１

絹経絣アトラスで全体が１種類の布地で作られている。中央アジアの多くの脚衣は腰部と裾部からなっているので、腰までアトラスで作られた脚衣はたいへんに贅沢なものであったろう。というのも、中央アジアの脚衣は腰部に吸湿性の高い柔らかい素材を使い、裾部は刺繍やジャヘクなど邪視よけや魔よけの意味も併せ持つ装飾があり、腰部が擦り切れたりして痛んだら、取り替えるからである。裾部は長期間にわたり、時には世代を超えて使われていく。

布は約44㎝の幅で、経糸に白と青の各単色糸、そして黄と白の絣糸を配し、緯糸に白色の絹糸を使う（図３）。両耳１㎝弱の幅で木綿の経糸を使っているのは、耳の強度を高めるためだろう（図４）。緯糸が表面に出ないように経糸を密にして、製織後に光沢処理を施している。すりおろしたタマネギを塗り、棒で叩いて光沢を出す伝統的方法についてマルギランのトゥルグンボイ氏から筆者は聞いたことがある[vii]。また、この作品は絣の折り返し部分を見ることができる（図５）。

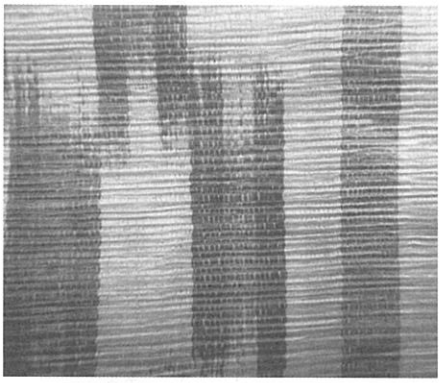


図３　イシュトン１　部分

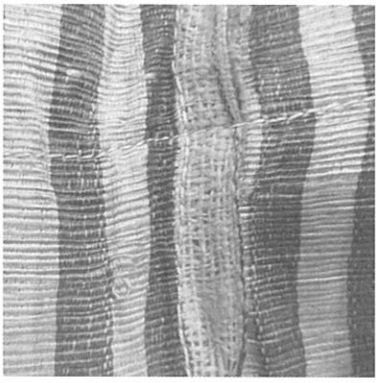


図４　イシュトン１　耳と縫い目

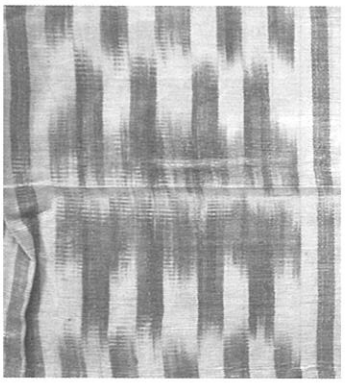


図５　イシュトン１
経絣のリピート部分

ウエストは外側へ三つ折りしてミシンをかけ、前後とも紐通し口がある。襠は中央で接ぎ合わせた菱形。裾にジャヘクのテープをミシン縫いしてから筒に縫っている（図６）。オレンジのフリンジは別付けである。脚部と襠は組み合わせて裁断できることが推定でき、４枚重ねにした布の一角を斜めに裁てば脚部と襠を一度に裁断できる（図７、８）。２メートル弱の布を１センチも無駄にすることなくイシュトンが作られたのだろう。

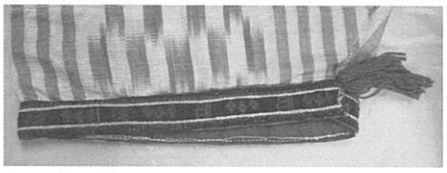


図６　イシュトン１　裾のテープとフリンジ

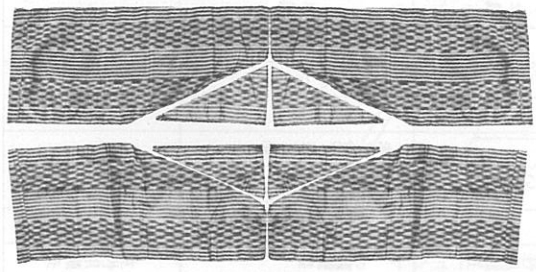


図７　イシュトン１　裁断推定

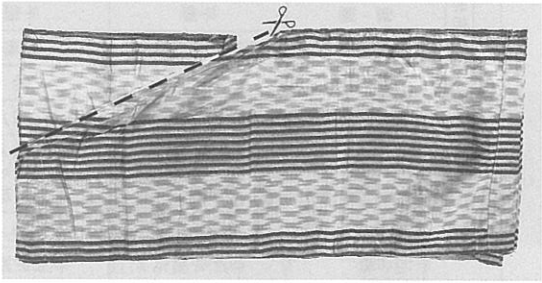


図８　イシュトン１　裁断法推定

調査作品

No.	民族	作品名称（民族語）	布																			裁断・仕立て			縁飾り		刺繍		寸法（cm）	所蔵者による年代	所蔵
			布地1										布地2	布地3	布地4	布地5	布地6	布地7	見返し・裏地など												
			経糸		緯糸		技法	組織	経密度（本／cm）	緯密度（本／cm）	幅（概寸）（cm）	絣・縞リピート	腰周り	襠	大腿部	脛1	脛2	脛3	裾見返し	裏地	その他	襠	布の接合	裁ち目の始末	フリンジ	ジャヘク	糸色	主な縫い方			
イシュトン1	ウズベク人	女性用脚衣（イシュトン）	絹	白／青／黄絣糸／耳：白木綿	綿	白	経絣 光沢あり	平織	—	—	44	不明 但し、経絣の折り返しあり	布地1に同じ、切り替えなし	布地1に同じ	—	—	—	—	青色木綿	—	—	菱形	ミシン、手縫い	—	別付け オレンジ色	ミシン縫いつけ	—	—	丈90.2	20世紀初頭	広島県立美術館
イシュトン2	ウズベク人	女性用脚衣（イシュトン）	絹	青・黄・濃ピンク・ピンク絣糸	絹	赤	経絣	平織	—	—	43	不明	白色木綿	布地1に同じ	—	—	—	—	木綿花柄プリント	—	—	菱形	ミシン、手縫い	—	別付け 多色	手縫いで別つけ	—	—	丈94.5	20世紀初頭	広島県立美術館
バラク1	ヨムート族、トルクメン人	女性用脚衣（バラク）	絹	赤／緑／白／黄（緩いZ撚）	絹	赤（緩いZ撚）	経縞	平織	28	22	41程度	経縞18回リピート	薄手木綿プリント 紺／赤／白	布地2と同じ	—	—	—	—	—	木綿経縞 朱／紺／緑／白 布地1に総裏	—	四角	ミシン、手縫い	—	—	—	白、赤、黒	チェーン・ステッチ、レーゼーデージー・ステッチ	丈81.4	19世紀	広島県立美術館
バラク2	ヨムート族、トルクメン人	刺繍裂（女性用脚衣）	絹	赤／黄／白／黒（以上S撚）黄黒撚り合わせ（Z撚）	絹	赤（Z撚）	経縞	平織	17	11	41	経縞14回リピート	—	—	—	—	—	—	—	プリント木綿 クリーム地に赤／紺 綾織 布地1に総裏	表裏合わせて黒糸ミシンで叩き押さえる	—	ミシン、手縫い	内外ともに裁ち目出さない	—	黒、手縫いで別つけ	白、赤、黒、緑、深緑、青、オレンジ	チェーン・ステッチ、レーゼーデージー・ステッチ、ボタンホール・ステッチ	40.7×39.0	19世紀	広島県立美術館
バラク3	トルクメン人	女性用脚衣（バラク）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白色木綿	青地木綿小花プリント	緑地木綿花プリント	青無地化繊サテン	黒地化繊赤花プリント	黒地木綿小花プリント	布地2	布地2が襠を除く裏全体に当てられる	布地2と布地4はミシン数列で押さえる	菱形	ミシン	なし	—	飾りテープをミシンで縫いつけ	白、赤、オレンジ	クロス・ステッチ	丈86.5	1997年頃	個人蔵

⑵　イシュトン２　ウズベクの女性用脚衣（イシュトン）（口絵16、図９-14）

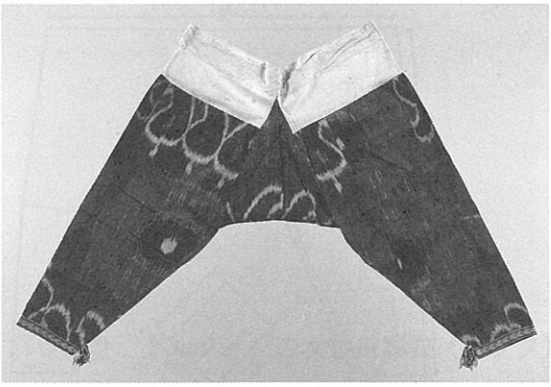
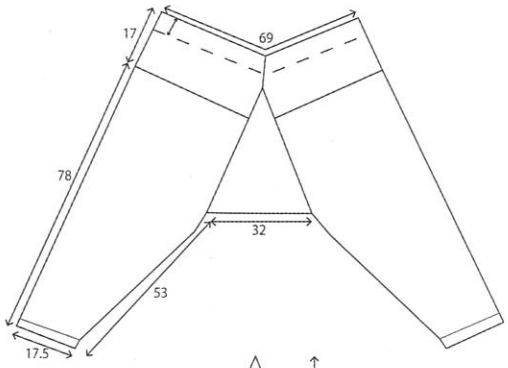


図９



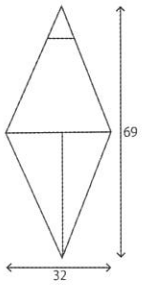


図10

図９　イシュトン２　ウズベク人「女性用脚衣（イシュトン）」
　　20世紀初頭　広島県立美術館蔵
図10　イシュトン２

絹経絣アトラスと白布で作られている。

絣布は、多色絣糸の経糸と赤色の緯糸で平織に織られている（図11、12）。布幅は約43㎝。

絣布は11のパーツを接ぎ合わせる（口絵20）。図13は接ぎの多い側の布接ぎ図である。両脇は反対側の生地と繋がっている。絹は木綿糸を使って手縫いで縫われるが、絣布と腰周りの木綿布はミシンで縫い合わせ、ウエストを外側に三つ折りしてミシンで縫う。紐通し口は脇にある。

裾見返しに花柄のプリント木綿を５㎝程つけ、模様のあるジャヘクを縫い付けてから筒に縫い、多色の糸で作ったフリンジを縫いつける（図14）。

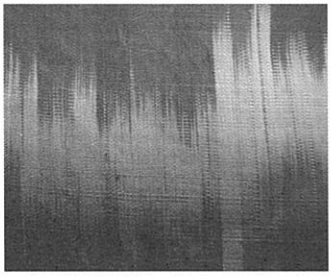


図11　イシュトン２　部分

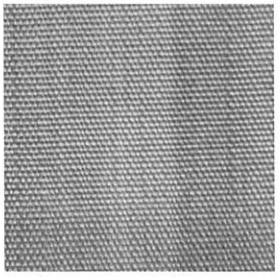


図12　イシュトン２　部分

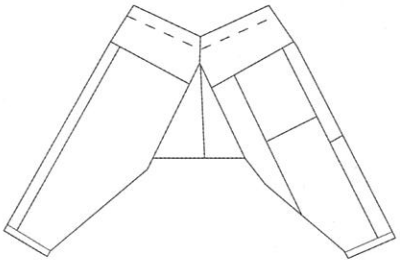


図13　イシュトン２
　　後ろ側の布接ぎ

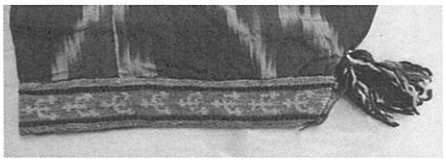


図14　イシュトン２
　　裾のテープとフリンジ

(3)　バラク１　トルクメンの女性用脚衣（バラク）（口絵17　図15-23）

図15　バラク１　ヨムート族、トルクメン人
「女性用脚衣（バラク）」19世紀
広島県立美術館蔵

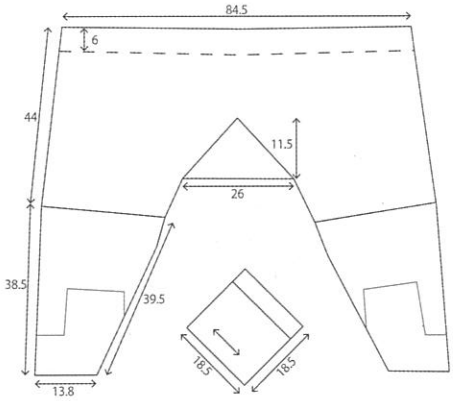


図16　バラク１

経縞布２種類とプリント木綿の計３種類の布で作られている。

経縞の手織絹布が膝下に配され、経緯ともにおそらく手紡ぎの絹で、赤、紺、緑、黒の経糸に赤の緯糸が使われ、経密度28本／㎝、緯密度22本／㎝、平織で織られている（口絵21上　図17）。耳が見えないので、布幅を測定することはできなかったが、おそらく41㎝程度と思われる。この布の裏全面に、赤地に緑、紫、青、白の経縞の木綿裏地が当てられている（図18）。裏表を合わせ、縫製してから刺繍を施し、白、紺、赤、黒の刺繍糸で３種類の文様とラインが刺される（図19-22）。ほとんどはチェーン・ステッチで、レーゼーデージー・ステッチも使われる。

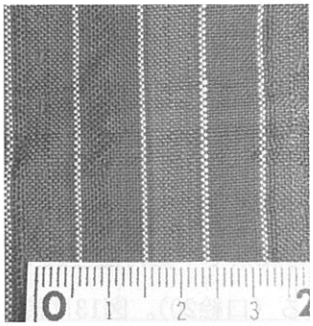


図17　バラク１　部分

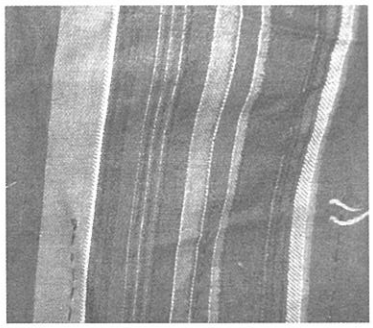


図18　バラク１　裏地

図19　バラク１　裾

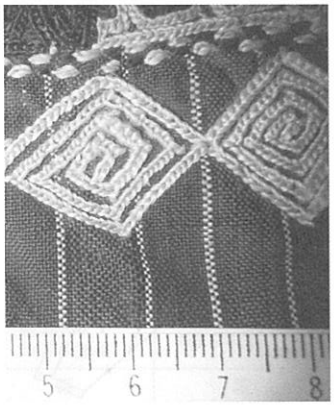


図20　バラク１　刺繍

図21　バラク１　刺繍

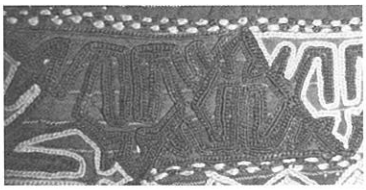


図22　バラク１　刺繍

腰と襠は同じ模様のプリント木綿布で、薄手でやわらかく、経緯糸に隙間のあるガーゼのような質感である（図23）。ウエストは外側へ三つ折りに折り返して並縫い、紐通し口は脇に作られている。

襠は２枚を接いだほぼ正方形の四角で、腰布との縫合は裁ち目の始末なしでミシン縫いする。

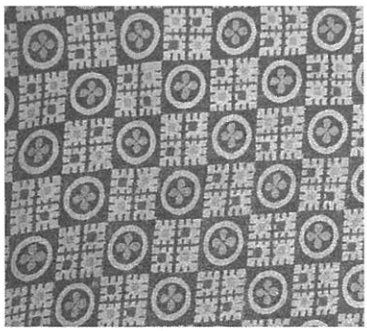


図23　バラク１　腰部の生地

⑷　バラク２　トルクメンの女性用脚衣（バラク）裂（口絵18　図24-34）

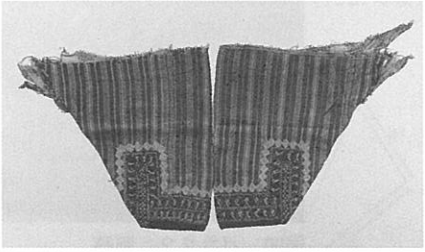


図24　バラク２　ヨムート族、トルクメン人「刺繍裂（女性用脚衣）」19世紀
広島県立美術館蔵

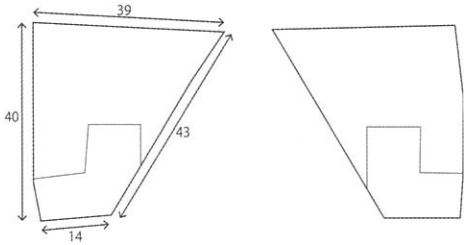


図25　バラク２

この作品は膝下部のみが残された裂である。痛みやすい腰部の布を取り替えて、緻密な刺繍のある裾部を長期間大切に使用するのが伝統であった。裂の上部に手縫いでつけられた青布が残っており、裂になる前の状態を想像させてくれる。左右の裂は一辺の中央付近で縫い留められている。

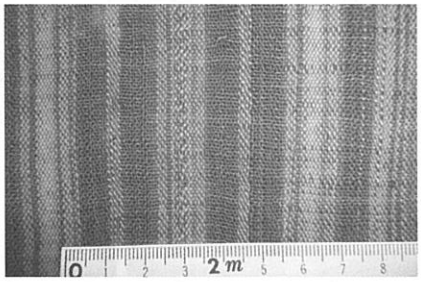


図26　バラク２　部分

裾の表地の経糸は赤、黄、白、黒で、緯糸は赤、経密度17本／㎝、緯密度11本／㎝で、平織に織られる（口絵21下　図26）。布幅は約41㎝。経糸の一部に黄色と黒色を撚り合わせて１本の経糸とした縞があり、経縞に動きのある表情を与える役割をしている（口絵22）[viii]。

裁ち目だけでなく、耳でも約５ミリの縫いしろを取って縫い合わせる。

裾の刺繍は裏地も合わせて刺され、白、赤、黒、緑、深緑、青、オレンジと色数が多い（図27-30）。チェーン・ステッチ、レーゼーデージー・ステッチ、ボタンホール・ステッチ等が認められる。刺繍してから縫製したのではなく、筒に縫ってから刺繍したことが刺繍が

図27　バラク２　裾

図28　バラク２　裾

連続していることからわかる（図28）。松本敏子氏によれば、刺繍のある部分をバラック・ユィーズと呼ぶ[ix]。黒のジャヘクが糸端を押さえて縫い付けられている。

全体に裏地がついている。数列の押さえミシンはズレを防ぐためだろう（図31）。

裏地はクリーム色に赤と青のプリントで、綾織で織られている（図32）。織りは６枚綜絖で、経12本、緯12本で完全組織を構成するものと思われる。図の綜絖通し順、タイアップ、踏み順は幾通りも考えられる中で、綜絖の通しやすさと左足と右足を交互に踏める一例を示しておく（図33、34）。

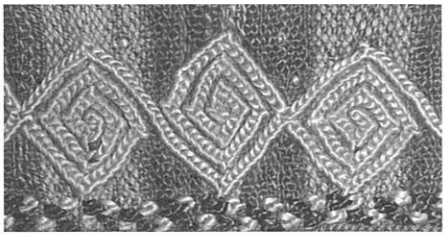


図29　バラク２　刺繍

図30　バラク２　刺繍

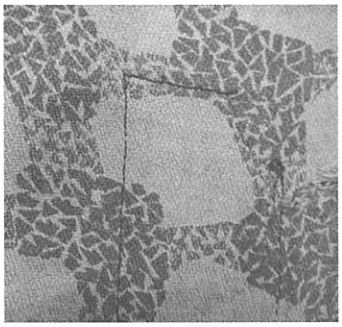


図31　バラク２　裏地

図32　バラク２
裏地拡大

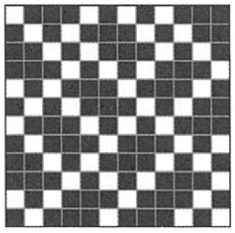


図33　バラク２　裏地
綾織の完全組織

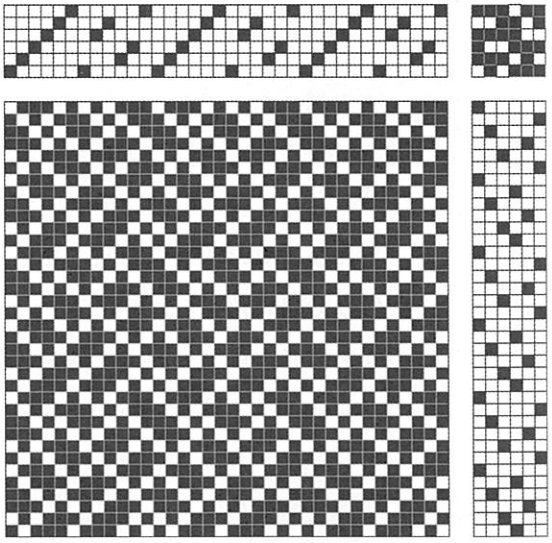


図34　バラク２　裏地の組織図および
綜絖通し順・タイアップ・踏み順

⑸ バラク３　トルクメンの女性用脚衣（バラク）（口絵19　図35-44）

図35　バラク３　トルクメン人
「女性用脚衣（バラク）」　現代（1997年頃）

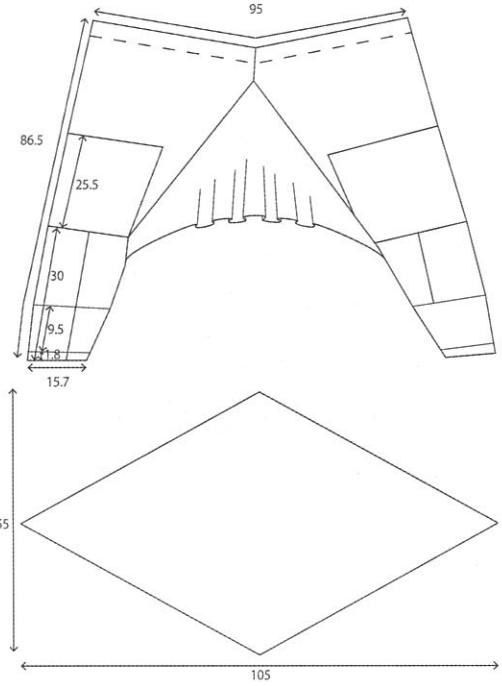


図36　バラク３

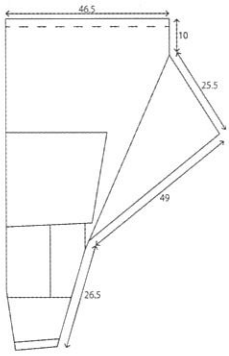


図37　バラク３

このバラクは、1997年トルクメニスタンのトルクチュカ・バザールで入手した。縫い方や裁ち目の始末等から自家用ではなく販売用に作られたことが推測される。

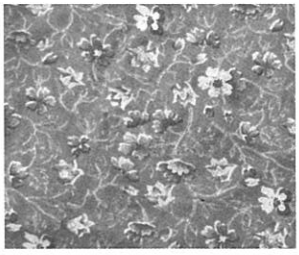


図38　バラク３　襠部分

図39　バラク３　脚部分

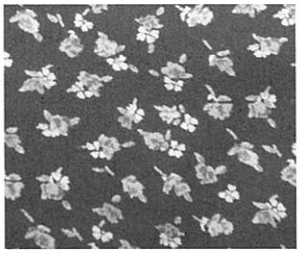


図40　バラク３　脚部分

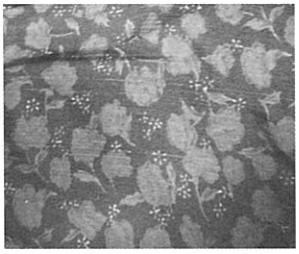


図41　バラク３　脚部分

このバラクには６種類もの布が使われている。基本構造は腰部に見えている白い木綿と襠の花柄プリント木綿の２種の布であり、両脚に布４種類を縫いつける。土台になっている白色木綿は目が粗く、通気性がよさそうに見える。ウエストは伝統的な外三つ折りではなく、内側に折り返して裁ち目を始末せずにミシン縫い、身体の斜め方向に紐通し口がある。襠は大きな菱形で、青地小花プリントの木綿布（図38）、襠と腰部の縫い合わせも裁ち目の始末はなく、ミシン縫いして片倒しである。残りの４種類の布がほぼ左右対称に貼りつけられ、大腿部に緑地の大柄花プリント（図39）、脛部に青無地サテン、黒地小花プリント（図40）、黒地赤花プリント（図41）の化繊あるいは化繊の混じった布が重ねられている。化繊のテープを縫い付けてから裾を筒に縫っている（図42）。仕立てる前に刺

された刺繍の糸は絹ではなく、混紡か化学繊維のようで、主にクロス・ステッチで刺される（図43、44）。このように、素材や作りは伝統的なものとはかけ離れている一方で、ゆったりした構造、広い襠、裾の刺繍やテープ等、外見から見た決まりごとは守られている。

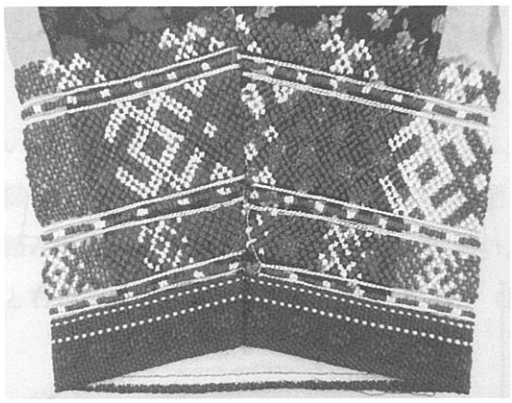


図42　バラク３　裾

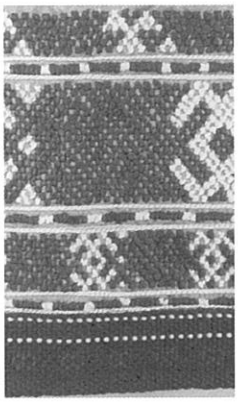


図43　バラク３　刺繍

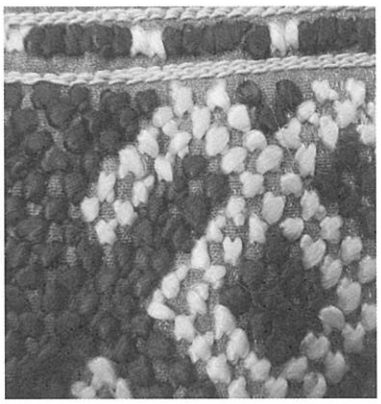


図44　バラク３　刺繍

3　まとめ

以上がウズベクのイシュトン２点とトルクメンのバラク２点および裂１点についての詳細である。

今回詳細調査した現代のトルクメンのバラク３は白色木綿がウエストから裾まで通して使われており、その上に襠を含む５種類の布が貼り付けて（縫い付けて）ある構造であった。1996年に当館で開催した「アジアの染織展」に出品のバラク（個人蔵　出品番号442）は、1960年代の制作とのことであったが、類似の作りで白色木綿に６種類の布が使われていた。

最初に作られるバラクは上から裾までの布に別の布を貼り付けたり、刺繍したりして作られ、着用によって腰部の生地が傷んだときに膝付近から切りとって新しいバラクに仕立てるのではないだろうか。つまり上下２段式になるのはバラク第２世代以降のことではないだろうか。数世代を経たバラクと第１世代の新しいバラクを比較して得た感想である。

トルクメンのバラク２枚の裾には手織りのふんわりした質感の経縞布が使われていた。双方とも縞は赤をベースに白や黄、緑、黒を混ぜたものであるが、バラク２では、トルクメンの伝統的な織布であるケテニィにしばしばみられる対照色撚り合わせの経糸が使われていた。ケテニィはコイネクというワンピースやシャツによく使われる紬のような質感のある布で両端に経縞が入れられるが、ここに対照色撚り合わせの糸の使用をしばしば見出せる。例えば、白と黒、黄と黒といった対照的な色を撚り合わせて１本の経糸として配することで、経縞に視覚効果が生まれ、経絣のような動きと複雑な表情を加味できる。バラク２では、Ｓ撚の経糸が並ぶ中、撚り合わせの糸だけはＳ撚２本を合わせたためにＺ撚となり、太さも２倍になっている。他の糸に太さと撚りを合わせるためには細めのＺ撚を撚り合わせてＳ撚としなければならないが、そのことは考慮されない、あるいはより強い効果を狙ってのことかもしれない。

トルクメンの布は元来自家製であったからか、平織が多いが、バラク２の裏地は６枚の綜絖を使う綾織であった。斜文線を崩した組織で織った上に赤と青の模様をプリントしている。あまり見かけな

いこの布の制作地は中央アジアか、それともロシアなどの域外なのだろうか。

旧ソ連領中央アジアの人々の着装も時代の流れにより変化しつつある。被衣はすでにほとんど見かけることはなく、中高年層のスカーフくらいであり、伝統的な衣装でさえシルエットや着丈の長さ、生地など現代的に変わってきた。コイネクの下にイシュトンやバラクを履いていない人もしばしば見かける。脚衣について尋ねると、本当は履くのだけど…とはにかみながらワンピースの裾を少し持ち上げて履いていないことを示してくれる。

一方、アムダリヤを南に渡ったアフガニスタン北部のトルクメンやウズベクには、伝統的な着装がより色濃く残っていると聞く。

ところが、20年以上前にアフガニスタンからパキスタンへ逃れてきた彼女たちの作る民族衣装は伝統的なスタイルよりもぐっと細身で、コイネクになぜか西洋風のダーツが入ったり、脚にぴったりフィットするイシュトンだったりする。貴重な絹経絣のアトラスでコイネクを作ってもらう時に伝統的なゆったりデザインで作ってくださいと念を押しても油断するとダーツをしっかり入れられてしまう。現代トルクメニスタンのコイネクよりも身体に沿ったシルエットである。外来ファッションの影響なのだろうか。

イシュトンやバラクをはじめ、伝統的民族衣装から読み取れることは多方面にわたる。中央アジアスタイルの脚衣が現代のテキスタイルデザイナーのフィルターを通して、案外身近に存在したりしていることも興味深い。今後、この伝統がどのような方向へ向かうのかを見るのが楽しみである。

【註】

i 『アジアの染織展』カタログ　広島県立美術館　1996年、福田浩子「中央アジアの刺繍布(スザニ)について」『関西大学博物館紀要』第10号　2004年、同「中央アジア・ウズベクの刺繍布（スザニ）－アイ・パラックと呼称される一群について－」『関西大学東西学術研究所紀要』第42輯　2009年。

ii 写真入りカタログはまだ発行できていない。ある特定グループについての考察として、福田浩子「中央アジア・トルクメン人エルサリ族のジュドゥルについて－広島県立美術館所蔵刺繍袋コレクションに見るアーモンド（バダム）文様－」『広島県立美術館研究紀要』第13号　2010年。

iii 福田浩子「中央アジア・トルクメン人の民族衣装コイネクについて」橋寺知子・森部豊共編『アジアが結ぶ東西世界（アジアにおける経済・法・文化の交流シリーズ）』所収、関西大学出版部　2011年で館蔵コイネクについて報告した。

iv 「中央アジアにおける工芸文化史の研究」への平成9年度ポーラ美術振興財団調査研究助成による。

v 松本敏子「トルクメン共和国の民族服－下衣について－」『衣生活研究』Vol.8 No.10　1981年

vi 脚衣に関連する論考として、例えば、加藤定子「タジクの民族服（三）」『服装文化』No.157　1978年、同「トルクメンのコイネクとバラク」『服装文化』No.172　1981年、同「中央アジア」『世界の民族衣装の事典』東京堂出版　2006年、松本敏子「トルクメン共和国の民族服－下衣について－」『衣生活研究』Vol.8 No.10　1981年に言及がある。また、『アジアの染織展』カタログ　広島県立美術館　1996年、『偉大なるシルクロードの遺産展』カタログ　株式会社キュレイターズ　2005年に脚衣のカラーあるいはモノクロ図版の掲載がある。加藤氏や松本氏の論考には、ソビエト時代の研究について文献紹介がされている。

vii 筆者は確認していないが、布に光沢を出すために卵白を塗る方法があるとも聞く。

viii 註iiiに対照色撚り合わせによる経糸について数例報告している。

ix 註vに同じ。

【参考文献】

加藤定子　「タジクの民族服（三）」『服装文化』No.157　1978年

加藤定子　「トルクメンのコイネクとバラク」『服装文化』No.172　1981年

加藤定子　「中央アジア」『世界の民族衣装の事典』東京堂出版　2006年

松本敏子　「トルクメン共和国の民族服―下衣について―」『衣生活研究』Vol.8 No.10　1981年
（松本敏子『足でたずねた世界の民族服２』所収　関西衣生活研究会　1985年）

広島県立美術館編『アジアの染織展』カタログ　広島県立美術館　1996年

福田浩子　「中央アジア・トルクメン人の民族衣装コイネクについて」　橋寺知子・森部豊・新谷英治共編（『アジアが結ぶ東西世界』〈アジアにおける経済・法・文化の交流シリーズ〉所収　関西大学出版部　2011年）

【図版】

○写真撮影

オーシマ・スタジオ：口絵15-18、図１、９、15、24

福田浩子：口絵19、22、図３-６、11、12、14、17-23、26-32、35、38-44

○製図・画像処理

福田浩子：口絵20、21、図２、７、８、10、13、16、25、33、34、36、37

【謝辞】

本稿をまとめるにあたって、トルクメニスタンおよびウズベキスタンでお世話になった方々、アフガニスタン北部からやってきたパキスタン・ペシャワル在住のトルクメン人・ウズベク人難民の方々、タチアナ・マヨロワ氏、ヒダヤト・シディキ氏、関西大学東西学術研究所および同大学総合図書館他多くの方々に多大なる御協力・御指導を賜りました。ここに記して謝意を示します。

（ふくだひろこ／広島県立美術館主任学芸員）

広 島 県 立 美 術 館　研 究 紀 要　第 14 号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM　No.14

発　行　日　平成23(2011)年3月31日

編集・発行　広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014　広島市中区上幟町2－22

2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel. 082-221-6246　　Fax. 082-223-1444

印　　刷　大成印刷株式会社

〒731-0138　広島市安佐南区祇園３丁目24－17

Tel. 082-875-3232